

朝のラッシュ時、オフィスのエレベーターは戦場だ。一本乗り遅れれば遅刻確定という瀬戸際、私は滑り込むようにして満員のエレベーターに乗り込んだ。

「ひっ……！ す、すみません……っ」

ぎゅうぎゅうに詰め込まれた密室。前後左右を他人の体温に囲まれ、身動き一つ取れない。最悪なことに、私の真後ろに立っているのは、私の部署で最も優秀で美しい人。藤本部長だった。

（うそ……なんで部長と同じタイミングに……っ。背中から、部長の圧がすごくて、心臓が止まりそう……っ）

「……お前、またギリギリの出勤か。危機管理能力が欠如しているな」

耳元に降ってきたのは、低い声。至近距離で感じる部長のシトラス系の香水の匂いと、吐息の熱さに、

私の背筋がゾクリと震えた。

チラリと見ると部長はすでに出社を終えていたようで、カバンを持ってはいない。大方用事があったり一度外に出て戻るところなのだろう。

「も、申し訳ありません……っ。電車が、少し遅れて……っ」

「言い訳はいい。……それより、そんなに震えてどうした。体調でも悪いのか？」

部長の手が、私の腰に添えられた。けれど、その手はスルスルと滑り、私のタイトスカートの裾をゆっくりと捲り上げていく。

（えっ……！？ ぶ、部長……っ！？ なに、して……っ）

同乗している他の人たちは、スマホを見たり、眠そうに目を閉じたりしている。誰も一番奥にいる私たちの間で、何が起きているかなんて気づいていな

い。

「あ、あ……っ」

部長の長い指が、ストッキング越しに私の太ももを撫で上げ、そのままショーツの縁へと侵入してきた。

「っ……ひっ！？」

「……静かにしろ。声出すなよ。……俺が、お前の『弛み』を正してやっているんだ。……光栄に思え」

冷たい言葉とは裏腹に、部長の指先は驚くほど熱い。指が私の秘部の割れ目をなぞり、そのまま熱を持った中心へと沈み込んだ。

エレベーターの密室に、機械的な駆動音だけが低く響いている。部長は無言のまま、私の背後からその熱い指先をスカートの奥へと滑り込ませた。

（……っ部長、なんでこんな。エレベーターの中な

のに……っ)

部長の指が、薄い下着越しに私の秘部の中心、一番敏感な突起を捉えた。そのまま、人差し指と親指で、クリトリスをむに♡と深く摘み上げる。

「っうん！？♡」

刺激が背筋に電流のように走り抜ける。私は咄嗟に自分の口を手で覆い、漏れそうになる悲鳴を喉の奥で押し殺した。

「……静かにしろ。誰かに聞かれないのか」

耳元で低く、温度のない声が響く。部長はそれ以上何も言わず、ただ黙々と、私のクリトリスをむに♡むに♡と執拗に揉みほぐし始めた。指の腹で突起を転がし、時にぐにり♡と指先を押し込むようにして、その感覚を私の脳に刻み込んでいく。

(あ、あ……っ♡ 部長の指が、クリを触ってる…
…っ♡ エレベーターの中なのに♡ ぐにぐに、され
て……っ♡♡)

部長の指は、焦らすようにゆっくりと、けれど確
実に力を込めて動いている。下着と粘膜が擦れ合い、
じわり♡ と熱い蜜が溢れ出してくるのがわかった。
布地が水分を含み、指が動くたびにぬちゅり♡ と
音がしそうでヒヤヒヤする。

「んん……っ♡ あ、あ、んっ……っ♡」

必死に声を我慢しているのに、指先のむにむに♡
という柔らかな。それでいて逃げ場のない愛撫が、
私の理性をじりじりと削っていく。

部長は私の顔を覗き込むこともなく、ただ無機質
な表示板の数字を見つめたまま、手元では残酷なほ
ど丁寧な蹂躪を続けていた。

ぐにり♡ むにゅっ♡ むにむに♡ むにむに♡

(だめ……っ、これ、声、出ちゃうよお……っ♡
ぶちょ……部長お……っ♡♡)

エレベーターがゆっくりと上昇する。表示される
階数が増えるたびに、人が減っていき、バレるんじ
ゃないかと羞恥心が募る。

むにゅっ♡ むにむに♡ むにむに♡ むにゅっ♡
むにむに♡

「うっ……ふ、うんんッッ！♡♡」

声にならない叫びが、自分の手の平の中に吸い込
まれていく。膝の力が抜けそうになるのを、背後か
ら私を支える部長の腕が、冷徹に、そして強固に繋
ぎ止めていた。

「ふっ♡ う、うんんッ♡ んんッ♡♡」

(どうしよ、イっちゃう。イっちゃうかもお、……
っ♡♡)

全身がガクガクと震え始める。クリトリスを蹂躪する指の動きに、私は目をぎゅっとつぶって、耐えていると、不意に手がおまんこから離れて行った。

ポーン、と無機質なチャイムが鳴り、目的の階に到着した。部長は、何事もなかったかのように指を引き抜くと、ハンカチで濡れた指先を拭い、私の乱れたスカートを整えた。

「……今日も時間いっぱい仕事をこなせよ」

そんなことを言い、部長は颯爽とエレベーターを降りて行った。私は震える膝を必死に押さえながら、女子トイレへと向かった。

＊ ＊ ＊ ＊

昨日、あの後まともに仕事にならなかった私は、部長を避ける目的で、いつもより一時間以上も早く

出社した。

早朝のオフィスビルは静まり返り、冷たい空気だけが廊下に滞留している。エレベーターホールにも人影はなく、無機質なステンレスの扉が鏡のように私の全身を映し出す。

（よし……これなら、誰にも会わずにデスクに着ける。……あんなこと、朝からされたら、身が持たないもん……っ）

安心してエレベーターの前で待っていると、後ろから足音がゆっくりと近づいて来た。その人物はすぐ隣で止まり、足元にスッと艶やかに磨かれた革靴が見える。心臓がドクリと跳ね上がる。

「……おはよう」

最も会いたくなかった人、藤本部長だった。

「あ……お、おはよう、ございます……」

「今日は早いな。感心な心がけだな」

「あ、ありがとう、ございます……」

低い、温度を一切感じさせない声。

エレベーターが到着し、逃げ場もなく、私は仕方なくエレベーターに乗り込んだ。その間、部長は私を一瞥もせず、私の斜め後ろという位置に立った。

広いエレベーター内に、二人きり。扉が閉まると、密室の静寂がより一層濃密になり、昨日蹂躪されたばかりの秘部が、思い出させるようにじんわりと熱を持ち始めた。

（なんで……。こんなに早く来たのに……っ）

上昇を始めた箱の中で、私はただ前方の階数表示を見つめていた。部長の視線が、背中から刺さるようで、私は一刻も早くフロアについて欲しいと願った。

けれど4階を過ぎたあたりで、ガクンッという腹に響くような衝撃と共に、エレベーターが激しく揺

れた。

「きゃっ……！？」

悲鳴を上げた瞬間、室内を照らしていた蛍光灯が消え、非常用の赤い予備灯がぼんやりと灯る。無機質な音が数回鳴り、表示板の数字が消灯した。私たちは、地上数十メートルの空中で完全に孤立した。

「……停まったか。復旧まで、少し時間がかかりそうだな」

部長の声は、あまりにも冷静だった。混乱も焦りもない。

「あ……あの、部長……管理会社に、連絡を……非常ボタンを……っ」

「……必要ない。この時間だ、すぐには来ない。それに前にも何回かあったが、10分前後で復旧した。電気系統の関係で時々こうなるらしい」

「そ、そうなん、ですか……」

「今現在、改善中だそうだ。……それより、せっかくの『時間』だ。有効に使わせてもらおう」

部長が、一步、また一步と距離を詰めてくる。壁際に追い詰められ、鏡面に背中を預けた私の腰を、大きな手が強引に引き寄せた。

「っう……！？ ぶ、部長……っ、だめ、です……っ、こんなところで……っ」

「……静かにしろ。声を出せば、外部のインターホンが音を拾うぞ。……それとも、守衛に自分の淫らかな声を聴かせたいのか？」

耳元で囁かれる冷酷な脅迫。私は守衛に声を聞かれてしまうかもしれない恐怖と羞恥で、咄嗟に唇を強く噛み締めた。

部長はそれ以上何も言わず、無言のまま私のタイトスカートの裾をゆっくりと捲り上げていく。ストッキングの滑らかな感触を指先でなぞり、そのまま

ショーツのウエストゴムに指を掛けた。

（そ、そんな。エレベーターが停まって、人がいないからって……！）

部長は自然な様子で私のショーツを横にずらした。昨日、弄られたことを思い出してじわりとした感覚の秘部が、冷たい外気に晒される。そこに部長の太い指先が、つん♡と突いた。

「っんっ！♡」

そのままびらびらを指で撫でるようにさすられ、腰が跳ねた。部長は私の反応を無視し、もう片方で広げると、まだ小さく閉じたままのクリトリスを親指と人差し指でむに♡と摘み上げた。

「あっ……っん！♡」

部長は無言のまま、人差し指と中指で私の粘膜を